

# 九份・金瓜石の映画を製作して 台湾を憶う

映画監督

林 雅行



林監督のドキュメンタリー映画『風を聴く』と『雨が舞う』

台湾北部の標高五八八メートルの基隆山。西側から見ると優しいなだらかな表情なのだが、東側からは険しく厳しい表情を見せる。この山の下に東洋一の金鉱があり、西側は九份。東側は金瓜石と呼ばれた。

一八世紀末に金脈が発見され、日本統治時代の一九三〇年代にゴールドラッシュを迎えた二つの金山。

九份は台湾の顔家の下で操業され、請負制で坑道を顔家から借りた人々が一攫千金を夢みて押し寄せた。金を掘り当てた鉱夫たちは夜になると背広に着替えて料亭や遊廓に繰り出した。街は賑わい不夜城のようであった。

一方、金瓜石は日本鉱業の下で日本人を中心に街が作られていった。日本鉱業を中心に下請け、孫請けが系列化され、日本人、台湾人、大陸からの出稼ぎが、決まった賃金を受け取った。電化された近代的な街が計画的に作られた。いずれも、戦争を経て、戦後、閉山した（九份は一九七一年。金瓜石は一九八七年）。

私は、この二つの街のドキュメンタリー映画を製作した。『風を聴く』台湾・九份物語』と『雨が舞う』金瓜石残照』の二作である。併せて約四時間になった。

『風を聴く』は、九份で生まれ、金

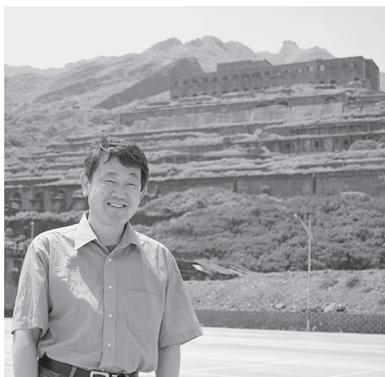
鉱に勤めあげた江兩旺さんの半生を軸に。『雨が舞う』は、日本鉱業で働いていた日本人やその子弟、台湾の鉱夫を軸に構成した。

皆さんが往事の話をすると、お互いに話をするなかで七十年前の記憶が蘇ってくる。実に細かな出来事も思い出されて、話はずみ、彼らは少女少女の表情になってくるようだ。

九份は、かつての商店街が土産物店街に、料理店や遊廓は茶芸館に生まれ変わり、観光客で賑わっている。金瓜石は、二〇〇四年に黄金博物館区として整備されたが、九份に比べて観光客は少ない。

この街を歩くと坑口や鉱石を運んだトロッコ、鉱具、病院の跡を見ることができし、金瓜石には巨大な製錬所や廃煙道が残っている。かつての産業遺産である。これらに私は限りなく関心を持つ。

ただ単にそれを見ているだけでは、それは遺物にすぎないが、ノスタルジ



金瓜石の製錬所跡の前で（2009年5月）

ツクに朽ち果て滅び行くものに思いをはせるのもいいであろう。たしかに写真や絵画を創作する人にとって描く対象に違いない。事実、すばらしい写真や絵を見た。そこで、私は考える。

いまは遺物としてしか残っていないこれらが稼働し、躍動していた頃、どんなだったのだろうか？ 想像してみよう。そして想像をふくらませる。さらに記録を読む。

当時を知る人を訪ねて行く。一人また一人と訪ねて行くと、まるでモザイクを組み立てていくように全体像が浮

かび上がってくるようで、往事の姿が見えてくる。当時の記録と人々の記憶を織りなす作業が、ドキュメンタリー映画の製作者としての私にとっての醍醐味である。

金瓜石の製作では多くの日本人に日本国内で会ったが、皆、高齢で金瓜石まで足を運べないが思い出を、台湾人も、九份や金瓜石を出た人も、今も住んでいる人も、多いに語ってくれた。

日本統治時代であったから、日本人に対する思いがそれぞれ交錯する。喜怒哀楽いずれもある。日本語を流暢に話す台湾人鉞夫が「差別され、貧しかったが、懐かしい」といった。食物が充分に取れなかった地方から金鉱へ来た台湾人。日本人に何かと差別されたが、ここに来れば仕事もあり、米飯に豚の油をかけた食事でありつけた。

私は、台湾の人々が胸の内に秘める複雑な思いに出会い、日本人であること、台湾で生きる人々のことを自分問いかける。

私の二つの作品を製作した時の取材ノートをもとに書き下ろした『最絢麗の黄昏過後——一位日本導演的九份・金瓜石採訪筆記』が台湾で今年三月に出版される。最終、ケラをチェックしている時、九份の江兩旺さん（83歳）の計報を聞いた。昨年十二月、台北市内の書店で江さんの著書『九分臺灣江兩旺口述歴史專書』（二〇〇九年十月刊）を見つけた。

江さん念願の書が遂に出来上がったのだと嬉しかった。三月には私の本を江さんに届ける予定でいた。そんな矢先の悲しい知らせだった。

九份の街を案内してもらいながら、江さんの人生や家族、九份の歴史や人々の心情、日本人との思い出などいろんな話を江さんから聞いた。江さんに触発され、私の台湾への関心が深まっていた。

私は、江さんの思い出とともに台湾を舞台とする次の作品にとりかかっている。